

ナチ女性の社会活動における戦略としての母性

—ナチ・イデオロギーと女性の地位向上のはざまで—

桑 原 ヒサ子

はじめに

ドイツ人女性のあるべき姿に対する最もポピュラーで伝統的な価値観に「子ども、台所、教会」という表現がある。ドイツ語でそれぞれの頭文字を取って「3K」とも言われる。次世代を担う子どもを産み育て、夫と子どもたちを世話し、教会が命じる道德律を守り伝えることが女性の使命というわけである。この概念は皇帝ヴィルヘルムⅡ世によって打ち出されたと言われているが、その成立は工業化と都市化現象によって性別役割分担が顕著になるもう少し早い時期だったろう。そしてヴァイマル共和国においては、この3Kをモットーに女子教育が行われていた。

しかし、3Kのうち「教会」の比重はだいぶ軽くなるものの、このスローガンはナチ支配下の女性像を象徴する表現であると思い込んでいるひとも多いだろう。ナチ政権下において、この概念はそう思われるほど徹底して政治的社会的意味を帯びたからである。1934年9月、ニュルンベルクのナチ女性会議でアドルフ・ヒトラーは女性たちに向かって次のように演説した。

男性の世界は国家であり、男性の世界は闘うことであり、共同体のために尽力することであると言えるなら、女性の世界はもっと小さな世界だといえるかもしれない。なぜなら、女性の世界は夫であり、家族であり、子どもたちであり、家だからである。もしその小さな世界を受け持とうとする者がいなければ、いかにして大きな世界は存続しえるだろうか。⁽¹⁾

1933年1月30日にナチ党が権力を掌握すると、上級公務員の女性を解雇し、労働市場から女性を排除し、女性を家庭に戻す政策が取られた。こうした女性差別的措置は、国民社会主義の敵から攻撃を受けることになった。だからこそ、ヒトラーは翌年の女性会議で、「あなたたちは子どもを産む以外、女性になんの使命も与えず、女性を見下そうとしている」との敵の批判に、母になることは女性を見下すどころか、最高の昇格であり、民族の息子や娘の母であることよりも女性にとって高貴なことは存在しないと応じた。⁽²⁾

19世紀末から教育、職業、政治分野で女性の権利獲得のために闘ってきた女性運動や、

ヴァイマル共和国における憲法上の男女平等、女性の高等教育の機会や女性参政権の獲得という流れからみれば、女性を公的領域から排除して私的世界に囲い込もうとするナチ政権の女性政策は退行でしかなかった。国民社会主義は家父長制に根ざしており、女性は抑圧されていたというのが、今日まで定説となっている。そうした政策に対して、当時ナチ女性たちは一体どう反応したのだろうか。たしかに彼女たちは良妻賢母を公的信条としていた。しかし自らの性を見下すイデオロギーに唯々諾々と従っていたとは私にはどうしても思えなかった。当時の官製女性雑誌『ナチ女性展望 NS Frauen Warte』に、闘争期から政権掌握直後までのナチ党の女性抑圧スローガンに驚きを感じたと回顧する記事⁽³⁾を見つけた時は、確信へ一歩踏み出せた気がした。ナチ女性組織を統一して設立された「ナチ女性団 NS-Frauenschaft」とナチ化を受け入れた非ナチ女性組織をまとめた「ドイツ女性事業団 Deutsches Frauenwerk」の機関誌であった『ナチ女性展望』に当たってみると、そこに掲載された全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンク Gertrud Scholtz=Klink の主張や女性団の活動報告は、男性だけで構成されたナチ指導部としたたかに渡り合って、彼女たちが女性の政治的社会的活動領域を拡大し、独自の活動を展開していたことを伝えている。ナチ女性政策についての定説は修正を迫られるように思えた。ナチ・イデオロギーが支配する中で、どういうプロセスによってこうした女性活動は実現されていったのか。いったいどれほどの規模で何を目的とし、どれほどの政治的・社会的自立性を持ちえたのだろうか。いくつか疑問が湧いてきた。

戦後の国民社会主義の女性研究は、60年代末の「新しい女性運動」を受け、70年代から活発になる。その議論の争点は女性は「犠牲者」か、それとも「加担者・犯罪者」だったのかの問題だった。「犠牲者」論者の立脚点は、上述したナチ・イデオロギーの女性蔑視・女性差別の視点だった。80年代に入ると、ジル・スティーブンソンや、とりわけクローディア・クーンズの研究成果がナチ政権を支える巨大な女性組織、「ナチ女性団」と「ドイツ女性事業団」を紹介し、普通の女性の活動の加害性を提示した。⁽⁴⁾しかし前者は、女性組織のボランティア性を強調し、政治的には重要ではないとし、後者も女性組織は国民社会主義指導部に服従させられ、その指導部になんら影響を及ぼしていないと結論付けている。全国女性指導者ショルツ＝クリンクの理念世界や政治活動に光が当てられるようになったのは、ようやくここ数年のことである。⁽⁵⁾

ナチ政権が女性を産む性として規定しその居場所を家庭に限定し、女性たちも良妻賢母を公的信条にしていたという定説に立てば、本論のタイトルはいかにも挑発的に響くだろう。だが、ナチ女性たちがいわゆるヴァイマル共和国時代の「女性解放」に与しなかったものの、実際には家庭に戻る気などなく、女性の教育的社会的向上を目指して活動した事実を考えると、ナチ・イデオロギーと駆け引きをするための戦略があったのではないかと

考えざるをえないのである。もちろんそうした戦略の奏功は、自分たちが打ち出したイデオロギーであるにもかかわらず、男性側が譲歩せざるをえない政治的経済的変化と不可分でもある。先に挙げたナチ党の女性差別的政策を批判する記事が『ナチ女性展望』の1936年5月第1号に掲載されたのであるから、その時期にはナチ党の女性問題に関する立場は大きく転換していたと考えていいだろう。

本論の眼目は、ナチ支配機構の中であって、これまで十分に考察されてこなかったナチ女性運動について、構造的、イデオロギー的、組織的、そして心理的レベルで再構成することにある。主要資料としては、先にも挙げた当時発行部数第一位を誇った官製女性雑誌『ナチ女性展望』を取り上げる。まず、この雑誌とその発行者であるナチ女性団について、簡単に紹介しておこう。

1931年、党の方針でそれまでばらばらに活動していたナチ女性団体をまとめてナチ女性団が誕生した。その翌年の7月にナチ女性団の機関誌として『ナチ女性展望』(1932年7月1日号～1944/45年度号)⁽⁶⁾が創刊される。1933年には、強制的同質化により非ナチ女性団体から「ドイツ女性事業団」が誕生し、ナチ女性団の指導下でドイツ女性事業団の活動が始まる。ナチ女性団成立後しばらく、その指導者ポストを巡る争いが起こるが、1934年2月にゲルトルート・ショルツ＝クリンクがナチ女性団、ドイツ女性事業団指導者に任命される。彼女は11月にはヒトラーから「全国女性指導者 Reichsfrauenführerin」の名称を与えられ、敗戦まですべての女性組織を統括した。したがって、雑誌に掲載された全国女性指導者の演説やナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動報告がここでの分析対象となる。

まずナチ党の初期のジェンダー理解を再確認し、そのイデオロギーに修正を加えざるをえない経済的社会的転換点を明らかにする。次に、ゲルトルート・ショルツ＝クリンクのジェンダー理解を確認し、彼女がいかにしてナチ政権の政治運営に適応しながら女性の活動領域を拡大し、全国女性指導者としての権力を獲得したのか、そのプロセスを追う。

I 国民社会主義のジェンダー秩序

1. 闘争期のナチ女性たち

1920年に結成された国民社会主義ドイツ労働者党（前身は1919年結成のドイツ労働者党）は男性の結社を自認し、女性党員は党指導部から排除されていた。そのため女性党員の活動は彼女たち自身に任されていた。ヒトラーは、『我が闘争』において女性問題について全く取り上げていない。彼自身が作成に深く関わり1920年に公表された「国民社会主義ドイツ労働者党25か条の綱領」には、女性に関して21条に次のように触れられているだけである。

国家は、母子の保護、青少年労働の禁止、体操とスポーツの法的義務化による身体的鍛錬の促進、青少年の身体的発達に取り組むすべての協会に対する高額な補助金支給により、国民の健康向上に努めなければならない。⁽⁷⁾

要するに、女性問題についてはまだ全く無関心だった。とはいえ、男性ナチ党員の大多数は、当時どの社会階層にも浸透していた家父長的立場（3Kに基づく保守的家族像）から反家族的男性同盟の立場まで広がっていたと思われるので、いずれにせよその女性像は非常に反動的であった。つまり子どもを産む性であり、男性に奉仕する性であった。

党指導部がまずナチ女性の団体に注目を向けるのは1931年頃である。男性党員とは別行動をとっていた初期の女性党員たちは、少人数の組織を作り、男性のために小旗や腕章を縫ったり、壁に非合法のポスターを貼ったり、身寄りのない失業中の突撃隊員の世話をし、街頭で寄付を集めたりした（図1）。裁縫の集まりは、次第に『我が闘争』や党のパンフレットを読み、討論する集会となり、地方でも全国レベルでも女性指導者が登場していった。党が女性を無視したことが、かえって女性の自立を助長する結果となったのである。

20年代で驚くほどの行動力を見せた女性活動家には1923年に「赤色ハーケンクロイツ」を組織したエルスベート・ツェンダーや1926年に「女性闘争連盟」を結成したグイダ・ディール等がいた。女性グループは党の指導を受けず、それぞれ独自の理論と行動を展開



図1 「選挙前の女性たちは旗作りで大忙し。選挙日に総統アドルフ・ヒトラーの支持者宅に下がる旗である。大小の旗、ワッペンがたゆまず作られる。150人の女性たちが街にこの旗章を示す貢献をする。これが終われば、冬期救援事業に彼女たちは専念する。」『ナチ女性展望』初年度17号(1933年2月1日)

するようになり、その中でツェンダーとディールの対立がエスカレートし混乱を招くようになっていた。ヒトラーから党機構の刷新を命じられたグレゴール・シュトラッサーは、ばらばらに存在していた多数の女性団体を親ナチ組織に統一する必要に迫られた。すでにシュトラッサーの支持を約束していたツェンダーは、愛国主義的な女性運動の創始を呼びかけ、ナ

ナチ党の正式な女性組織としてドイツ女性団を構想した。そして先述したように1931年、党指導部は全てのナチ女性団体を解散させ、「ナチ女性団」を誕生させた。翌1932年秋には、ナチ女性団は党機構における主要機構に昇格する。ただし、法文に基づくのは1935年3月のことである。

ナチ女性団が成立したとはいえ、初代指導者となったツェンダーと、シュトラッサーが彼女と同等の権限のあるポストを与えたディールとの対立は解消しなかった。党指導部からは、状況の改善のために男性指導者を置くべきとの声が上がったが、選挙活動が活発な重要な時期にその対処はあまりに危険すぎると却下された。闘争期の古参の女性指導者たちはいまだに女性たちの間で大きな賛同と共鳴を見いだしていたからだだった。

結局、1934年2月にゲルトルート・ショルツ＝クリンクがナチ女性団代表に就任するまで続く主導権争いは、ヒトラーの側近たちが有効な解決策を出せずに黙認したため、女性に関わる問題は空転したままだった。

2. 1934年ニュルンベルクの党大会における女性会議でのヒトラーの演説

1933年に権力を掌握したナチ党は、反動的政策を繰り出してきた。その一つが、上級官吏職からの女性の締め出しだった。74人の女性全員が職を失い、州やその他の自治体で1万9千人の女性官吏が、家族による扶養が可能な場合という条件付で全員解雇された。女性教師も15%減少した。法律分野の女性の就業は3%と少なかったが、絶えず嫌がらせを受け、1936年以降は、たとえナチ党員の女性であっても判事や検事の職に就くことはできなかった。⁽⁸⁾ 女性の大学進学も全学生の10%という入学制限が定められた。

こうした専門職にかかわる締め出しに加えて、男性失業者を減少させるために、1933年6月「失業減少法」によって労働市場における女性差別は制度化された。十分な収入のある男性の妻あるいは娘である女性は全員職場から解雇されるとした。また失業減少法に組み入れられた「結婚資金貸付制度」は、男性工場労働者の月収の4～5倍の最大限1000マルクを無利子で貸し付ける制度だった。経済的に苦しい若い夫婦が新婚生活を始めるための調度等を揃えるためであったが、受給条件は妻の退職だった。また、子ども1人産む毎に四分の一の額の返済が免除されたので、4人の子どもの産めば、返済義務はなくなった。したがって、この制度は経済政策、労働市場政策、人口政策的意味を持っていた。

こうした初期の女性差別政策に対するナチ女性たちの当惑は、先に触れた『ナチ女性展望』の記事にも読み取れるし、実際「新国家が女性を必要としないと分かっていたら、ヒトラーのために運動することなど絶対になかったでしょう」⁽⁹⁾ という声も女性指導者たちの中から上がった。ナチ女性たちは、ナチ党を支えたそれまでの努力が報われ、国家の支援を受けて、自分たちが思い描いていた活動が可能になると期待していたのだった。

ナチ女性団の前で公式にヒトラーが演説したのは、ようやく1934年9月ニュルンベルクの党大会の際に開催された女性会議の席上であった。この時には、強制的同質化により非ナチ女性団体からドイツ女性事業団が誕生し、ナチ女性団代表をめぐる権力争いも収束して、全国女子労働奉仕団指導者に就任したばかりのゲルトルート・シヨルツ＝クリンクが2月に二つの女性組織の指導者となり、11月にはヒトラーから全国女性指導者と名乗ることを許される安定期に入ったばかりの時期だった。

ヒトラーは演説の始めに国民社会主義運動の困難に満ちた闘争期、すなわち「仲間の多くが投獄され、あるいは亡命し、多くの者が負傷して病院に運び込まれ、あるいは殺害された時期」のこと、「問題に立ち向かうには理性に叶った方法しかないドイツ精神がうめぼれておきながら、まさに理性によって多くの人が我々に背信行為を働いた時期」を振り返り、「国民社会主義運動と私に揺るぎない忠誠心を持ち続けた数多くの女性たちが当時いたことを覚えている」と女性たちを持ち上げた。そして、感情と本能は女性の特性である一方、理性と精神は男性の特性である対比し、国民社会主義の両性理解について自らの考えを開陳した。

女性の感情、特に心情はいつの時代も男性の精神を補完するように働いてきた。(…)
それぞれが、自然によって与えられた使命を果たす限り、両性間に対立などありえない
ということは、自然と神の摂理の素晴らしさではないだろうか。(…)

男性の世界は国家であり、男性の世界は闘うことであり、共同体のために尽力すること
であると言えるなら、女性の世界はもっと小さな世界だといえるかもしれない。なぜ
なら、女性の世界は夫であり、家族であり、子どもたちであり、家だからである。もし
その小さな世界を受け持とうとする者がいなければ、いかにして大きな世界は存続しえ
るだろうか。(…) この二つの世界はそれゆえ決して妨げ合うことはない。それらは相
互に補完し、男性と女性が対になるように、それらもまた対になるからである。

女性が男性の世界、男性の主たる領域に侵入するのを私たちは正しいこととは思わな
い。この二つの世界が分かれていることを私たちは自然だと感じる。(…)

男性が自分の民族の闘いの中で犠牲を払う一方、女性は家庭においてこの民族の維持
のための闘いで犠牲を払う。(…) 女性が産む子どもの一人一人が、民族の存亡を賭け
た女性の闘いなのである。自然と神の摂理が男女に与えた使命をそれぞれが果たしてい
れば、両性は互いに評価し尊敬し合わなければならない。(…)

このように女性はいつの時代も男性の助力者であり、従って最も誠実な友であり、男
性は何時の時代も女性の守り手であり、それゆえ最良の友であった。(…)

墮落した主知主義によって、神が結び合わせたものが引き裂かれてしまうことを私た

「私たちは阻止する。(…)それゆえ私たち国民社会主義者はもう何年も、女性の政治生活への配置という私たちの目には品位を傷つけるようなことは阻止してきた。(…)私たちはそれゆえ、自然と神の摂理が指定したように女性を民族共同体の闘いの中に組み入れたのである。(…)」
女性黨員たちを闘争期の同志と認め、その活動に対する賞賛と感謝で始まっており、全体的にナチ女性団への歩み寄りを感じさせるスピーチとなっている。政権を樹立後、「一つの民族」や「民族共同体」というイデオロギーに基づく国造りを主唱するのであれば、女性問題を避けて通ることはできなかったし、民族共同体の半分を構成する女性たちの協力は欠かせなかった。男性と女性の相違を表現する「精神」と「本能」、「理性」と「感情」、「大きな世界」と「小さな世界」という二元論には明らかに男性優位が内包されているが、その表現はかなり抑制されている。両性の間に「対立」はなく「相互に補完し合う」関係であることが強調されているからである。

この考え方には、男性と女性の領域が分離していることが前提となっている。男性の領域は「大きな世界」すなわち国家であり、民族のために闘い、女性を守ることが仕事である。その一方で女性の領域は「小さな世界」すなわち家庭であり、女性の仕事は民族の存続のために子どもを産み、夫を助けることである。これが国民社会主義の理想的男性・女性像であった。このジェンダー理解の正当性は、「自然」、すなわち生物学的根拠と「神の摂理」という宗教的根拠に根ざしていた。したがって、女性が政治世界、つまり男性の「大きな世界」に侵入することは許されなかった。この警告は、「女性解放」を許したヴァイマル共和国時代に対する攻撃だった。そして、男女のこの分離された領域が守られ、それぞれの義務が果たされるのであれば、両性は「互いに評価し尊敬しなければならない」、すなわち「同等」であるという見解をヒトラーは示した。

3. アルフレート・ローゼンベルクの思想的影響

ヒトラーの両性観、とりわけ二元論と両性の領域分離には明らかに国民社会主義のイデオロク、アルフレート・ローゼンベルクの影響が見て取れる。

ローゼンベルクは、1930年に出版された『二十世紀の神話』の「第3篇 来るべき国」の中で、その女性観や女性解放の排斥について述べている。⁽¹⁰⁾ 彼は男性の「精神」と女性の「感性」を両性の分極性として挙げ、男性の精神の創造は感性的女性的なものから生まれてくるというロマン主義的立場を取っている。その意味で、女性の不可欠性、両性の補完性を強調し、女性の世界が決して男性の世界に劣るものではないとしている。男性の精神的創造分野として、国家建設、法典、政治的軍事的宗教的分野、そして哲学や芸術まで

挙げられている。一方で、人種の維持は女性とその性質にかかっているとし、人種の浄化を実践することこそ女性の最も重要な使命だと指摘している。

ヒトラーの演説は明らかに、ローゼンベルクを思想を下敷きにしているが、ヒトラーが「女性の世界は夫であり、家族であり、子どもたちであり、家だからである」という家父長的基盤に立っているのに対し、ローゼンベルクは、良妻賢母であるとか、女性の居場所は家であるとか、家族が国家の基礎であるという考え方は持ち合わせていなかった。

ローゼンベルクの女性問題に関わる言説には興味深い内容が2点ある。その一つは1930年の時点で、「今日女性化した古き世界の崩潰のただ中であって」という表現でヴァイマル共和国を女性として表象していることである。国民社会主義者は、第一次世界大戦においてドイツは国内の社会主義者や共産主義者の裏切りで降伏に追い込まれたと理解していた。社会主義指導者の多くがユダヤ人であったため、反ユダヤ主義が勢いを増した。社会主義者によって支持されたヴァイマル共和国は、ドイツにとって屈辱的なヴェルサイユ条約を受け入れたうえ、ユダヤ人と女性にヴァイマル憲法を通じて完全な市民的同権を与えた。ローゼンベルクは、ヴァイマル共和国の個人主義、平和主義、人間性、人類愛、奴隷解放といった思想で男性が完全な男性でなくなってしまった（「解放された」男性）ことに生活危機の第一の責任を求め、男性が頼りなくなったから女性が男性の領域に入ってきて来ようとする다고指摘している。すなわち、本来国家建設は男性の仕事であると考えるローゼンベルクは、女性化したヴァイマル共和国に国民社会主義の男性的国家を対峙させている。そのコンテクストでみると、ローゼンベルクの有名な「女性解放からの女性の解放」はジェンダーのあり方に終始するだけでなく、もっと大きなレベルで反ヴァイマル、すなわち反ユダヤ主義、反民主主義、反平和主義を過激に攻撃する道具として使われていたことが分かる。

1935年の党大会における女性会議でヒトラーは再び演説するが、その中で使われる「女性解放という言葉はユダヤ人知識人だけが考え出せる言葉だ」という表現も同根である。この発言をマシュー・セリグマンたちは「見当違い」と断言するが⁽¹¹⁾、この表現も当時のイデオロギー的コンテクストの中で読み取らなければ、その言わんとする意味は理解できないだろう。

注意を引く2点目は、民族の中における女性についての考え方である。民族の全生活に関わる女性には、あらゆる教養を受ける機会が開放されねばならず、舞踏、体操、スポーツを通して男性同様、身体的鍛錬ができるよう気を配るべきだと言っている。この点のちに、ショルツ＝クリンクが率いるナチ女性団とドイツ女性事業団の活動を通して実現されることになる。またローゼンベルクは「反民族的な民主主義的マルクス主義的防衛体系を撃破した」⁽¹²⁾ あかつきには、今の労働市場で見られるような、女性の力を消耗させる

就労の仕方を改める社会秩序—そこには母性保護法の厳密な実施も含まれている—を設けたうえで、女性がその力を発揮するあらゆる機会を開放すべきであると主張している。もちろん、裁判官、軍人、統治者は絶対に男性でなければならないとの但し書きはあるが。

権力掌握後、政界からはもちろんのこと、女性上級公務員の排除、女医に対する差別は、たしかにローゼンベルクの思想と合致していた。しかし彼は、侵されてはならない男性領域が厳然と存在するものの、女性の就労に反対しているわけではない。それどころか環境を整えた上で推進すべきものと考えていた。シュトラッサーはローゼンベルクのこの考えを共有していたし、民族の集団動員の賛同者だったゲッベルスも女性が公的生活と労働に一定程度参加することは不可欠と考えていた。⁽¹³⁾ したがって、公式の演説の中で強調される「女性の居場所としての家」は「ヒトラーのイデオロギー」であり、ナチ指導部の統一的理解では全くなかったということである。

「ヒトラーのイデオロギー」の基盤である家父長的ジェンダー認識は、1920年代の一握りの女性たちを興奮させた「新しい女性」という自由よりは家父長制を歓迎し、これまでの教育と経験を通じて身につけた母親としての役割の認知を求める大多数の女性、そしてまた大多数の男性の心情を背景としていた。会員数20万人を擁し1932年にはナチ化を受け入れていた全国ドイツ主婦連盟は家政以外のすべての仕事からの解放を要求していたのである。もちろん、女性を労働市場から排除して家庭に戻す措置は第一に、家族を養わなければならない男性のための失業対策であった。1932年2月の失業者は620万人、就労者の3人に1人という最高値に達し、政権を掌握する1933年1月もまだ600万人の失業者を抱える時期であった。しかし、間もなく経済状態が好転し労働力不足が顕在化すると家父長的女性政策は最大の困難に陥る。イデオロギーと実際の指導との間、保守的理論と回避できぬ近代化との間の大きな矛盾が明らかになるからである。

ナチ女性たちは当然のことながら、こうした指導部の女性政策について事前に何の相談も受けていなかった。彼女たちは政治世界に加わりたいとは思わなかったが、自分たちが理想とする活動を展開するためには、ヒトラーのイデオロギーに抵触しないよう努めるほかなかった。次の章で、全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンクの理論と彼女に指揮された女性たちの活動を見るが、それはローゼンベルクが政権奪取後に女性のためになすべきこととして思い描いていたことに酷似している。

ミュンヘン現代史研究所史料保管所にはショルツ＝クリンクとローゼンベルクの間で交わされた書簡が残っている。ローゼンベルクは全国女性指導者の仕事を高く評価し、彼女の職務に直接、間接的に関係するすべての議論の場に彼女を参加させた。困っている作家の出版援助や、女性美術史家が「ドイツ芸術の家」に採用されるようショルツ＝クリンクに力添えを願っている。ショルツ＝クリンクも、ナチ女性団での演説やゼミの講師

をローゼンベルグに依頼している。時候の挨拶、新刊本の献呈など、ローゼンベルグとの交流が最後まで続いていたことが明らかになっている。⁽¹⁴⁾

Ⅱ 全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンクの女性理解と女性領域の拡大

1. ショルツ＝クリンク就任以前のナチ女性たちの理論

ナチ女性団初代指導者となったツェンダーとディールの対立は、間もなくすると女性組織の統率権を巡る若い世代のリューディア・ゴチェブスキーとパウラ・ズィーバーの争いに移っていった。女性という新しい行政組織の支配権を狙うドイツ労働戦線長官ローベルト・ライはゴチェブスキーの、内務大臣ヴィルヘルム・フリックはズィーバーのそれぞれ後ろ盾となった。

ディールはローゼンベルグやゲッベルス同様に、男性の弱体化を指摘し、機械化の時代によって女性が家から工場に駆り出されて無能となってしまったと主張し、その責任を女性解放運動と男女同権思想に帰している。男女の役割の分離と相互作用、男女の役割の同価値を要求し、女性を「男性の利益を支える良き伴侶」とみなす家父長的理念を批判した。シュトラッサーは、初代ナチ女性団代表となった闘争的なツェンダーよりも女性に対して大きな影響力をもつディールに期待したが、彼女は自分のポストである文化および教育問題の専門担当官の権限を超えて、女性政策の他の領域まで口を出すようになり、シュトラッサーを失望させることになった。

ツェンダーの後任に1933年4月に任命されたのは、ドイツ女子青年団の指導者だったゴチェブスキーだった。彼女に期待されたのは、ドイツ女子青年団の教育指導を巡るナチ女性団と、ヒトラー・ユーゲントの監督者バルドゥール・フォン・シーラッハとの争いを仲介することだった。

彼女は就任前から、民族共同体を脅かすものとして、一つには民主主義的女性運動、一つには家族を崩壊させる危険をもつナチ党の男性同盟思想を批判していた。女性解放運動には与しなかったが、彼女自身、少なくとも女性の自立要求には賛成の考えだった。ドイツ女子青年団の教育と動員について、男性の監督では国民社会主義女性運動の男性化が起る短所を指摘し、女性は国民社会主義的であると同時に女性独自のスタイルを見いだすべきであると主張した。この立場に、女性解放的意図を見いだした党は、彼女をその年の9月中旬に解雇した。地方の女性指導者たちも、まだ20歳の、経験不足で急進的な女性に指導されるのを嫌ったのである。

内務大臣フリックの後援を得て、内務相の女性問題顧問官となったズィーバーは、女性公務員の排除や、ランクが低く賃金の少ないポストへの降格が行われると、女性でも失業すれば生活できなくなるケースが多数あることをデータで示し、フリックに譲歩させた。

女性公務員の法律上の地位に関する法の 1933 年 6 月 30 日版は、継続的に経済的問題が生じない場合にのみ女性たちを退職させることができる、と変更された。その際フリックは、青少年福祉、青少年育成、部分的には学校の授業でも女性公務員の活用が必要である、と布告した。この経験はズーバーに、男性の考えを覆すことができるという自信を与えたかもしれない。しかし、コチエブスキー解任後の混乱を抑えるためにナチ女性団、ドイツ女性団の指導者として送り込まれたのはゴットフリート・クルマッハーだった。

そもそも男性であることが拒否の根拠であったが、ナチ女性団のメンバーはクルマッハーの就任に男性同盟的考えを女性領域に押しつける党の方針を見てとった。そのため、彼もまた短期間で辞任するはめになった。ゲルトルート・ショルツ＝クリンクが登場するまでの過渡期の女性組織を指導したのは、ナチ国民福祉団指導者のエーリヒ・ヒルゲンフェルトだった。

2. 1934 年から開戦まで

(1) 全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンクと全国女性指導部

a. ゲルトルート・ショルツ＝クリンクの登場と官庁としての全国女性指導部

ゲルトルート・ショルツ＝クリンク (1902 年～1999 年) は 1934 年 1 月に全国労働奉仕団指導者コンスタンティン・ヒーアルから全国女子労働奉仕団の指導を任されることになりベルリンに招聘された。ヒーアルは、大きな生産性を期待できるにもかかわらず、未だ組織化がされていないドイツ女性という集団を全国労働奉仕団にまとめ上げるようヒトラーから指令を受けていた。ナチ女性団、ドイツ女性事業団の全国指導者のポストに就くのは翌月の 2 月 24 日のことだったが、候補者として彼女は全くの新顔だった。

ショルツ＝クリンクは、1929 年 (または 1930 年) に夫のクリンクとナチ黨員になっている。政治活動を開始するのは、突撃隊員だった夫が 1930 年 3 月に心臓発作で急死してからである。夫の友人で党の同志でもあるバーデン大管区指導者のローベルト・ヴァーグナーからショルツ＝クリンクは、ケールとオッフエンブルクの女性運動の組織化を依頼される。10 月にはツァンダーによって創設された「ドイツ女性団」のバーデン大管区女性指導者に就任するが、1931 年 10 月にすべてのナチ女性組織が「ナチ女性団」にまとめられた後もそれまでのポストを維持しただけでなく、加えてヘッセンも指導することになった。1932 年になると自発的女子労働奉仕団のために、教会組織の慈善団体との連携に手腕を見せた。ナチ党の権力掌握後は、ヴァーグナーから女性組織顧問官としてバーデン内務相に呼び寄せられ、女性団体の強制的同質化を推進するよう依頼されている。5 月から西南ドイツ、すなわちバーデン、ヴュルテンベルク、プファルツにおけるドイツ女子労働奉仕団の設立を任された。その年の秋に、のちに全国労働奉仕団指導者となるヒーア

ルと知り合っている。グルマッハー退任後の1934年2月始めにナチ女性団、ドイツ女性事業団を指導するのがまたもや男性のヒルゲンフェルトと決まったので、ドイツ女性事業団が解散させられるのではないかと女性たちの間で囁かれた。その誤解を払拭するために、彼は直ちにナチ女性団とナチ国民福祉団の女性指導者たちを集めて、全国女性指導者候補者について協議した。その場で、ショルツ＝クリンクを含め何人かの名前が浮上した。ナチ指導部は、若くて急進的なゴチェブスキーで苦い経験をしていたので、ショルツ＝クリンクが32歳と比較的若いことで若い世代と理解し合え、4人の子どもの母であり、また未亡人として比較的歳をとった女性たちの信頼も得られると考えた。そして女性団体の強制的同質化と女子労働奉仕団の徹底した構築で見せた彼女の手腕に期待がかけられた。

1934年2月24日にナチ女性団とドイツ女性事業団の全国指導者（全国女子労働奉仕団指導者は1936年まで）となったショルツ＝クリンクは、5月にはドイツ赤十字全国女性連盟指導者（1938年からはドイツ赤十字の幹部会の第Ⅲ課）に就任し、7月にはドイツ労働戦線指導者ローベルト・ライによりドイツ労働戦線女性局長に、8月には政治組織最高指導部のナチ経営細胞組織審議会の女性保護部門顧問のポストに就いた。9月8日の党大会では、女性会議の席上でドイツ女性に向かって語りかけたヒトラーの直後に演説をしている。その後、11月にはヒトラーから「全国女性指導者」の称号を与えられた。（図2）つまり彼女は就任後数ヶ月にして、さまざまな権限の基礎を固めることができたのである。1934年5月には、ヒルゲンフェルトを通じてライバルのジーバーを失脚させたショ



図2 1935年9月の党大会におけるナチ女性会議で「右から、全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンク、総統、ルドルフ・ヘス、全国指導者ヒムラー、全国大臣Dr. フリック、全国大臣Dr. ゲッベルス」『ナチ女性展望』第4年度8号(1935年10月)

ルツ＝クリンクには同性の敵はいなくなった。彼女のランクは、「中央部局長 Hauptamtsleiterin」で、総統代理のルードルフ・ヘスの下に位置した。このランクは「全国指導者 Reichsleiter」より下位に当たる。彼女が「全国女性指導者」の名称を与えられたにもかかわらず、正式に全国指導者の地位を得られなかったのは、党の方針では女性が指導的政治的役割に就くことを禁じていたからと考えられる。しかし、シオルツ＝クリンクは「全国女性指導者」という新たなポストで次第に、事実上の全国指導者の役割を果たすことになる。

彼女は党の男性たちからますます承認されるようになり、1935年3月に内務大臣フリックから「人種・人口政策顧問」に任命され、1936年4月には「ドイツ労働戦線の名誉と懲戒最高法廷」構成員に、1936年末には「ドイツ法律アカデミー」会員、同じく1936年に「全国子たくさん母親同盟名誉指導者」として受け入れられた。そして1936年11月9日、シオルツ＝クリンクはヒルゲンフェルトと共に、ナチ党黄金名誉徽章を受賞している。1934年から36年までにナチ女性団員は80万人から200万人に膨れあがっていた。1935年2月からはナチ女性団のエリート性を保つために、一定の条件を満たした者しか入団を許可していない。1935年3月にはナチ女性団は党の構成組織に格上げされ、女性組織も大管区（34あった大管区は1941年時点で43に増えた）、管区、支部、細胞、班（40～50世帯から成る）の階層構造に倣って構成されるようになった。1939年時点でナチ女性団・ドイツ女性事業団に所属する女性のうち100万人以上が、階層構造の女性組織の中で何らかの役職に就いていた。

1934年にナチ国民福祉団の建物の一角で仕事を始めたシオルツ＝クリンク指揮下の全国女性指導部は、全国女性指導者の権限拡大、すなわちナチ女性団とドイツ女性事業団の活動領域の拡大によって、1936年6月にベルリンの総統本部へ引っ越し（図3）、100室



図3 「全国女性指導部の会議室」
『ナチ女性展望』第5年度18号(1937年2月)



「模範的なオフィス」

以上の仕事部屋を使って仕事を展開した。全国女性指導部は、ドイツ女性事業団のすべての活動を計画し、女性活動全てについて組織的政治的決断を下したのである。地方レベルでドイツ女性事業団を指導するのはナチ女性団の指導者たちであり、党の組織としてのナチ女性団はショルツ＝クリンクに直属していた。そして、彼女の直接の上司はヘスだけであった。すなわち、ショルツ＝クリンクは国民社会主義の女性たちの代表であるだけでなく、上位にいる男性の指示に依存していたものの、一つの巨大な役所の指示権限をもつ女性指導者でもあった。全国女性指導部は、協会でも団体でもなく、また党の委員会でもなく、官庁だったのである。(図4)

b. 官僚組織としての全国女性指導部

ショルツ＝クリンクは全国女性指導部のスタッフ選びの際に、アカデミックな世界から何人もの女性を採用した。彼女の影響力を確かなものにするには、自ら通曉していない分野でも専門的能力があるように発言できなければならなかった。彼女が博士号を持つ女性に取り囲まれていたことは、国民社会主義の公的には反エリート、反インテリの宣伝に矛盾したにもかかわらず、党から批判されることはなかった。(図5) 全国女性指導部では1934年から4人の女性法律家が勤務した。法曹界からの女性の排除で激しい議論が起こったが、ショルツ＝クリンクは女性上級公務員試補問題を和らげるために、全国女性指導部や女性領域にかかわる国家レベルの役所や党組織に法律家となった女性を採用して、そのキャリアを保証した。

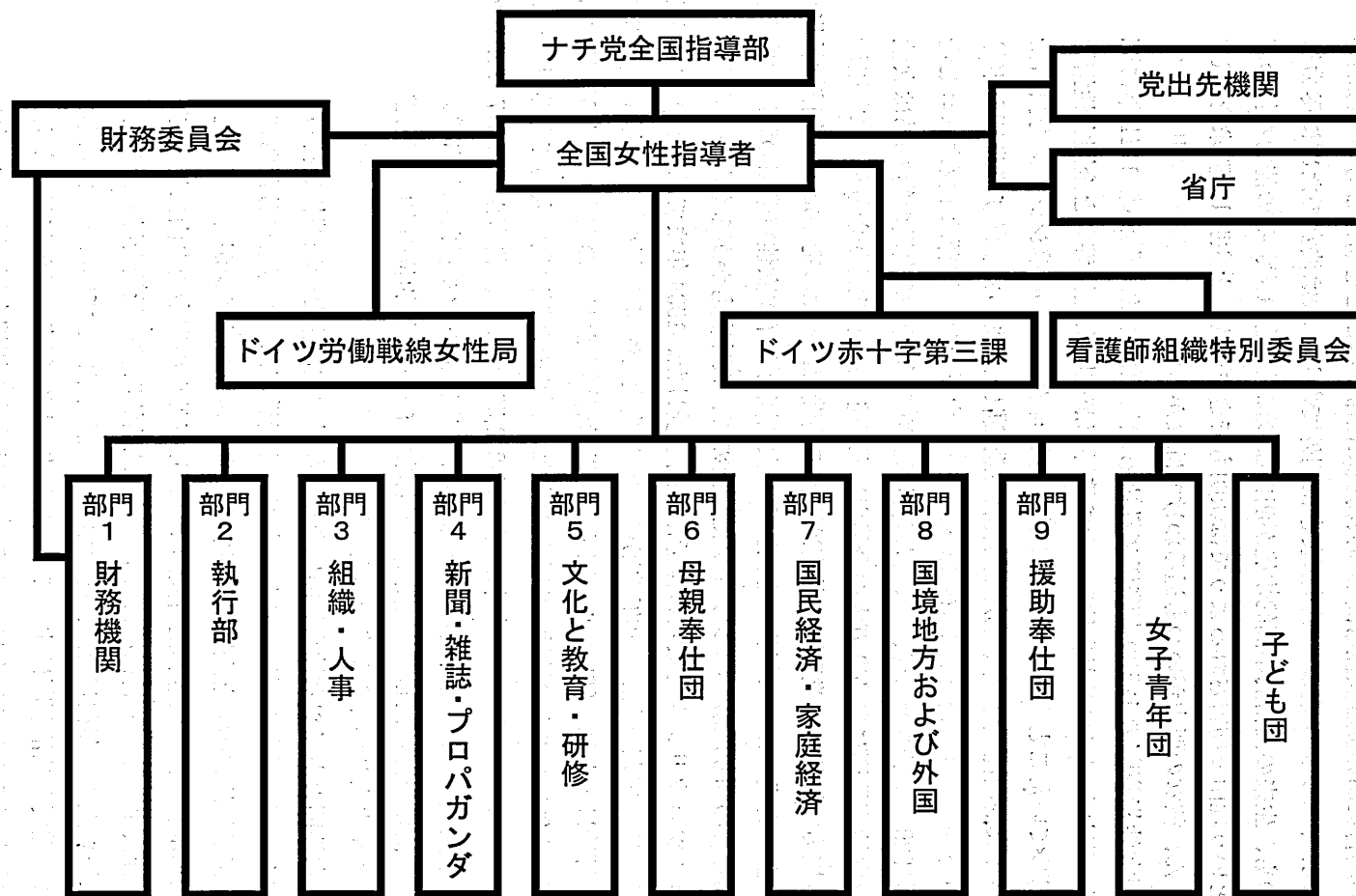
インテリ女性の採用については、自分の立場が安定してくると、女性領域以外の部署にも提案を行っている。たとえば1938年の女性天文学者、Dr. ギュッソウの例である。ギュッソウはベルリン・バーベルスベルク天文台の上級助手を務めていたが、上級職公務員に女性は就けないという規定から、空席となっていたにもかかわらず、観測者ポストに就任できなかった。ショルツ＝クリンクは、後に総統秘書となるマルティン・ボルマンに「総統は<原則と



図5 『『国民経済 / 家庭経済』部門指導者 Dr. フォアヴェルク夫人と Dr. クラウゼ嬢』
『ナチ女性展望』第5年度18号(1937年2月)

図4

全国女性指導部組織図



『ナチ女性展望』第7年度16号(1939年2月)

して>比較的高いポストの公務員に男性を任命することを望んでおられる。このことは、個々の場合においては女性も高等の公務員に任命することを妨げるものではない」と弁明し、「Dr. ギュッソウ嬢のケースはまさに例外であり、私は彼女のために尽力したい。というのも、生来の芸術的学問的才能が明白なのに推奨されず、その能力を持つ者が女性だからという理由で妨害されるようでは釈明もできません」と主張し、要求を通して⁽¹⁵⁾。もちろん、彼女の要求がいつも通るわけではなかった。

全国女性指導部の125の事務所に勤める職員数は、1936年から1941年に170人から580人に膨れた。このこと自体が、ナチ指導部が全国女性指導者と全国女性指導部の働きを承認していたことを表している。ショルツ＝クリンクのポジションを強固にした理由の一つには、女性組織の会費から生まれる金銭収入があった。ナチ女性団とドイツ女性事業団の会員は、月会費として前者は30～80プフェニヒ、後者は1プフェニヒを支払っていた。1939年時点でナチ女性団個人会員は200万人（ナチ党員の約40%は女性だった）、ドイツ女性事業団には400万人の会員がいたから会費収入はかなりの額にのぼった。⁽¹⁶⁾ 闘争期も権力掌握後も、党財政の基礎は党員の会費であった。そのため、全国女性指導者は巨額の会費を党のために提供できた。ナチ女性団とドイツ女性事業団の階層的序列組織の中で働く者の約90%がボランティアだったので、人件費もかからなかったからである。

ショルツ＝クリンクと彼女の側近は月給を受けた。1934年まではショルツ＝クリンクもボランティアだったが、1935年から被雇用者として450マルクの月給で賃金リストに載り、月給はのちに1,200マルク（平均的労働者の8か月分の賃金）に上がった。そのほか、毎月1,000マルクの補助金が上乘せされた。この金額は党の大物であるローゼンベルクやゲッベルスの1943年の年収が前者は243,563マルク、後者が424,317マルクであったことと比較すると、ずいぶん控えめだが、年収4,000マルクだった当時の高校教員と較べれば5倍以上だったし、上級団指導者としてSSの比較的位の高い将校だった夫の年収、20,000マルクよりいくらか多かった。⁽¹⁷⁾

ナチ女性団とドイツ女性事業団は全く別な財政統治権と管理機構を持っており、前者はナチ党の財務委員会の下にあった。全国女性指導部は、予算を自分たちで立てることができたが、最終的にヘスと全国財務長官シュヴァルツのサインが必要だった。ドイツ女性事業団はベルリンに登録された自立的団体として独自の資金を自由に使っていた。

国民社会主義体制の特徴は、ヒトラーが政治的助言や議論を嫌ったことから、中央政治機関は紙の上では存在したが、その本来の機能を果たしていなかったことである。その代わりに、重要な政治判断はすべて全国指導者、国家秘書、政治指導者たちの個々の集まりで下された。このシステムによって一つには政治の極端な個人化、つまり関係者の政治的自立意識と、他方では権限領域の封建化と複雑な平衡化が起こった。この自己指導の原則

と領域分離という考え方を一致させ、全国女性指導者の自立性は考えられた以上に大きかった。重要な党要人への影響力や、彼女の活動の組織的財政的基盤を背景に、彼女の役割は予定されていたよりずっと高いレベルに達した。名義上はヒルゲンフェルトの下に位置したが、実際には彼女の上司は総統代理であったヘス一人だけだった。

(2) ショルツ＝クリンクの思想

1934年3月6日に党大管区女性団指導者の大会でヒルゲンフェルトはショルツ＝クリンクを「ナチ女性団とドイツ女性事業団の指導者」として紹介した。そして、女性問題について、男性を補完する「現代的女性」を創り出すことが国家の課題であり、「男性の仕事と同価値である女性の仕事」によって「民族共同体は建設される」と付け加えた。ここには、その年の党大会でヒトラーがナチ女性たちに向かって演説する内容が先取りされている。つまり、男女それぞれの分離された活動領域において、「民族共同体」の「建設」に協働して奉仕するとき、男女の「平等」は保証されるという考え方である。

こうした発言に沿うように、「新生ドイツにおける女性の立場」(1934年8月第2号)⁽¹⁸⁾の記事の冒頭で、ショルツ＝クリンクは新国家における女性問題に関する方針が変更されたことを次のように述べている。

今はまだ国家の精神生活に比重が置かれているが、女性を国家の公的生活に組み入れるプロセスは、国民社会主義の権力掌握以後、国家の利益のため、そしてとりわけ参画する女性世界の利益のために、実に徹底したコース変更を受けることになった。

ここには、女性が公的生活に入っていくことがすでに暗示され、その目的に向かう動きの中に国家の利益だけでなく、女性世界の利益が意識されている。それでは、女性のアイデンティティについてショルツ＝クリンクはどう考えていたのだろうか。

ドイツにおいて、女性問題という言葉は誤った女性運動によってひどい不評を買ってしまった。(…)平均的ドイツ男性は、たとえ人格が備わった女性でも同等の人間として認めるつもりもないし、これからもそうすることはないだろう。それゆえ国会での闘争が必要なのだ、などと言ってはならない。ドイツ女性は、再び女性自身となり、それによって男性の対極となる時、男性からあますところなく認められると私は確信している。女性が男性から権利を要求したこれまでの状況とは逆に、今日女性は当然のこととして、そして男性と権利を争うことなく、民族と国家における義務と課題を果たし、自分自身分たちにもともと備わっている活動領域を引き受けるのです。

ショルツ＝クリンクの女性のアイデンティティも、生物学的性差に根ざしたローゼンベルクのロマン主義的「女らしさ」「男らしさ」に立脚していることが分かる。したがって、男女同権とは相容れなかった。「女性解放」は間もなく反ヴァイマルから反ボルシェヴィズムの宣伝道具として使われることになるが、共産主義国の女性は「同権」を理由にその性を顧みられず、女性本来の仕事をした上に労働世界においても男女区別なく働かされ搾取されていると理解された。ショルツ＝クリンクは「女性解放」がドイツ女性に対して同様な状況を作り出す危険を確信していた。そのことは、のちに見るように、女性労働に対する彼女の見解の中にはっきり現れている。別な見方をすれば、ナチ政権は女性を政治から排除した男性指導体制であったから、女性組織の頂点に立ったばかりのショルツ＝クリンクにとって、男性との諍いを生むだけの女性運動を主張することは得策ではなかった。それは彼女の前任者たちの運命を見て十分承知していたはずである。

上の引用にある「自分たちにもともと備わっている活動領域」とは、狭義には次世代を産み育て、家庭を快適に維持する家政を指している。当時はドイツだけでなく、ヨーロッパの国々で出生率の低下が大きな問題となっていたから、子どもを産むことは、民族の維持という点で特別に重要な意味を持っていた。それも権力掌握後、ドイツの血を守り、遺伝病のない次世代を生み出すことにイデオロギー上の至上性が与えられると、「母であること」、「母性」は崇拜の対象にまで祭り上げられた。これにより、ショルツ＝クリンクとナチ女性団にとって「母性」は、彼女たちの活動と権限拡大の強力な切り札となりえたのである。「自分たちにもともと備わっている活動領域」を広義に解釈すれば、「女性としての特性」を生かした活動を「公的生活」においても展開していこうとするショルツ＝クリンクが目論見も読み取ることができる。

私たち国民社会主義者にとって、これまでの一般的意味での女性運動も女性問題も存在せず、私たち民族が私たちに課した問題は、私たちが民族の一部として男性と共に、両性のそれぞれが自分たちの領域で自分たちのやり方に則して、しかし相互に絶対的な尊敬と協働をもってすれば常に解決できるのです。

ここには、民族のために男女がそれぞれの領域で協働する限りにおいて、相互に尊敬されるという理想的な社会構造が描き出される。ショルツ＝クリンクは「男性に対して闘うのではなく、男性と共に建設する」道を選択し、受け入れられるのである。ヒトラーも1935年の党大会の女性会議の席上で、仕事の内容は違っていても、男女の役割は「等価値」で「同等」なのであると保証した。⁽¹⁹⁾

ナチ女性団、ドイツ女性事業団の指導者となって間もないショルツ＝クリンクのこの主張には、その後の演説にみられるマクロ的テーマが出そろっている。すなわち、国民社会主義国家における女性とその役割のアイデンティティ（ジェンダー別の分離された領域）、民族共同体建設に参画する女性の使命（公益の優先）と共同体建設における男女の役割の平等である。このマクロ的テーマから、母性と女性教育、女性労働、女性の集団的奉仕活動といった女性活動に直接結びついたテーマが生まれる。それに、国民社会主義の賞賛、自らが率いる女性組織の目標達成への推奨や成果の賞賛といったプロパガンダ的テーマが加わる。

(3) 女性領域の拡大
ショルツ＝クリンクの課題は、強制的同質化によってナチ化を受け入れた非ナチ女性団体から構成されたドイツ女性事業団を国民社会主義体制に強固に組み込むことだった。この課題を彼女は難なく成し遂げる。彼女の前任者のゴチェブスキーが非ナチ女性団体を妥協なく従属させようとして強制的同質化に失敗した経験を踏まえて、ショルツ＝クリンクは個々の女性団体に、党の方針に厳密に服従させる一方で、ドイツ女性事業団内で比較的高い独自性を約束した。

すぐにショルツ＝クリンクの関心は自分の職務拡大に集中した。そのため、常に党の他の部署や組織との協働を探っていた。

a. ドイツ労働戦線女性局

女性の最大のブロックは、ドイツ労働戦線(DAF)の中にあつた。ドイツ労働戦線の女性局を通して、全国女性指導者であるショルツ＝クリンクは500万人の女性労働者を監督することができた。女性局は労働戦線長官ライによって設置され、全国女性指導者の仕事も最終的には彼の監視下にあつた。したがって、独自の女性組織ではなかった。女性局を組織する女性たちのうちナチ女性団、ドイツ女性事業団の会員は一部でしかなかった。女性局は特に母性の健康、衛生問題、労働保護や労働権に関心をもった。ショルツ＝クリンクは、性はどうでもいいという考え方は女性を抑圧するとして、マルクシズムの女性性無視を批判した。彼女にとって、女性局は女性の労働法と職業における女性性を守る場所と位置づけられた。

女性性は労働に、特に機械労働に適さない、工場は女性をだめにし、女性でなくする
とよく言われる。こうした考えは間違いである。私たちはこの点についても、物事の

正しい立場を取らなければならない。女性の内的力が労働の配分を決める限り、すなわち
われわれ力と労働が適切な調和を保っている限りは、就労女性が機械労働をしようとも女

の二性でいられるのです。⁽²⁰⁾ 1934年の党大会女性会議で演説したショルツ＝クリンクの発言は、母性尊重のイデオロギーがある中で、生活を支えるために就労を余儀なくされている女性労働者たちにとって救いとなっただろう。さらに、同じ演説の中で女性企業内ソーシャルワーカーの設置が予告されている。彼女たちは、女性労働者に技術指導をし、職場や私生活で困ったことがあれば相談を受けるのが役目だったが、国民社会主義の世界観を伝え、労働者以外の女性たちとの連携をはかることも重要な仕事だった。

『ナチ女性展望』1936年1月第2号の年頭の挨拶の中で、ショルツ＝クリンクは、まだ失業問題は完全に解消されたわけではないが、国民が自信を取り戻せたことに対して総統に感謝の言葉を述べている。実際、ヤルマル・シャハトの経済政策によって、権力掌握時に600万人だった失業者は、1934年1月は330万人、35年1月290万人、36年1月250万人と順調に減少した。⁽²¹⁾ 苦難と困窮の時期を乗り越えたという安堵感を持てるようになったことが伺える。完全雇用への見通しが見え、その年の8月には自給自足経済を目指してヒトラーの「四カ年計画」が発表される。この再軍備政策の一環として、労働力不足を補うためにショルツ＝クリンクは工場や事務所に女性を送り込むよう命令を受けた。これを受けて、1937年の党大会に向けて、全国女性指導部もドイツ労働戦線女性局も女性の就労を前面に打ち出した展覧会を準備した。

今日、家と台所における仕事の枠を超えて、女性の意識的協力が全体的建設計画に欠かせない。その際、特に重要なのは、女性が女性のやり方で自分の領域で仕事をし、活動の楽しさ、考えることもせずに生きていくのではなく、小さな活動領域であろうが大きな活動領域であろうが全体をしっかりと見る目を持って仕事に取り組むことである。(全国女性指導部の展覧会「国家における女性動員」より)⁽²²⁾ ドイツ労働戦線女性局は展覧会のデータとして、服飾産業と事務職の66.5%、繊維業の53.5%、商業と交通の38.4%、食料・飲食業の37.3%が女性就労者であり、その内の三分の一が既婚者であることを明らかにした。その上で、女性の労働とその成果は、女性の身体能力と調和していなければならないという原則が守られるよう女性局は努めてきており、これからも女性を重労働から解放し、有給休暇を取るための職場交代、企業内福祉活動、母親休養へ送る活動のほか、家庭内での問題にも対応し、職業上の専門知識・技術を得るための職業研修を開催するなど就労女性の支援を宣言した。⁽²³⁾

1937年には婚姻奨励法第三次改正法第2条2項により、結婚資金貸付を受けても結婚

後の妻の就業が認められるようになった。1938年2月第1号の『ナチ女性展望』は、女性の職業を特集しているが、そこには全国女性指導者の次の様な言葉が掲載された。

家庭、事務所、工場、学校、医師あるいは看護師として女性がどこにいても、重要なのは、どのように働いているかである。女性はそれによって評価される。私たち国民社会主義者がはっきり知っていなければならないことは、すべての女性が必ずしも母として最も大きな充実感を見いだすことができるわけではないということです。もし女子青年が就職したいと思い、その適性があるなら、それが実現できなければならない。しかし、就業は真の使命感に基づいていなければならないのです。⁽²⁴⁾

ここでは、女性の居場所であった「家」は事務所、工場、学校、病院と並列に置かれているにすぎない。驚くべきことは、母になることは女性の幸せとは限らないことを、女性の国民社会主義者だけでなく、男性にも突きつけたこと、そして、「性別」によってではなく、「適性」による就業を若い女性たちに勧めていることである。

この女性理解は、1934年にヒトラーがナチ女性に向かって語った女性理解とは真っ向から対立する内容である。しかし、全国女性指導者は、彼女の前任者のようにその職を追われることはなかった。イデオロギーに矛盾することを承知で女性労働力を求めたのはナチ指導部だったからだ。1933年から36年にかけて女性就労者数は485万人から536万人に増加した。この数値はナチ党が非難したヴァイマル共和国時代よりわずかながら上回っている。この事実を目の当たりにして、家政以外の仕事から解放されると期待していた保守的ナチ女性は当惑し、不満を表明する女性社会学者もいた。女性組織の統率と動員は今や全国女性指導者にかかっていたので、党指導部のショルツ＝クリンクに対する期待は大きかった。ショルツ＝クリンクは、「四カ年計画」告知後に露わになった矛盾に満ちた党の立場と女性組織との間で注意深い仲介を行った。

しかし、こうした状況はショルツ＝クリンクに有利に作用したと考えられる。先の彼女の発言は本音と考えていいだろう。労働市場への女性の進出は、それ自体国家の建設に対する女性の参画を強固にするものだった。女性が国家にとってなくてはならない存在であると男性も認めれば、おのずと男女同権は勝ち取れるというのが彼女の考え方であったから、チャンスと捉えただろう。その一方で、民族の維持にとって重要な母性の尊重を盾に、女性の搾取が起らないよう、職場環境や労働条件について女性局を通して改善させる権限も彼女は握っていたのである。1938年、ドイツは経済的に最も繁栄し、人々は豊かな生活を享受できる時期を迎えていた。

b. 女子労働奉仕団 (FAD) の成立と活動

女子労働奉仕団はショルツ＝クリンク自らにより 1930 年に設立された。経済恐慌間は、失業者を世話することにその存在意義を見いだしていたが、1934 年 1 月労働奉仕団は男女に分離された。その理由をショルツ＝クリンクは次のように述べている。

「女子労働奉仕団の動員はおまけのようなもので、キャンプの男子青年のために料理、洗濯、繕いをしていた。しかし、これは女子労働奉仕団の教育課題にとって正しい道ではなかった。女子青年たちも一団となって民族に奉仕すべきで、背後に引っ込んでい

ばいいわけではない。女性性について、自分について考えられるようにならなくてはならない。女子労働奉仕団が一つの指導の下にまとまらなければならない。⁽²⁵⁾

「若い女性たちが国家に対する集団的奉仕活動を通じて国民社会主義の世界観を学ぶこと

のできる女子労働奉仕団は、国民社会主義の必須で価値ある教育の場と考えられた。キャンプでの教育内容は主に、子たくさん家庭の家政援助、農業・農村家庭の援助、入植者の家事と労働援助だった。ショルツ＝クリンクは、「農家の女性たちが若くして老い、使い尽くされ、どんな病気に苦しんでいるかは驚くべきことです。私たちは彼女たちを民族の源と呼びながら負担を加えている。彼女たちを援助することが最重要課題です」と呼びかけた。ショルツ＝クリンクが女子労働奉仕団を指導したのは、1936 年までで、その後この組織は全国労働戦線女子青年団に取り込まれた。

c. ドイツ赤十字 (DRK) の活動

ドイツ赤十字は女性活動から切り離されていたが、1934 年から 1936 年までショルツ＝クリンクがドイツ赤十字の全国女性連盟を指導していた。1938 年 1 月 1 日にドイツ赤十字全体が再組織化されるのを機に、ショルツ＝クリンクは連盟を解散し、ナチ女性団との新しい連携部局を作り出そうとした。ドイツ赤十字の幹部会の新たな第Ⅲ課は彼女に指導されることになった。その部局もドイツ労働戦線女性局と同様の機能を持った。

d. ナチ国民福祉団 (NSV) の活動

1,700 万人の会員をもつナチ国民福祉団はナチス・ドイツにおいて第二の規模の大衆組織であり、ヒルゲンフェルトによって指導された。この福祉組織の主たる仕事は、困窮するドイツ人の援助と福祉事業だった。このナチ国民福祉団は男性の監督が強い組織であったが、それでもショルツ＝クリンクは、ナチ国民福祉団の中の重要な職務を手にした。

たとえば、女性労働力の動員、看護師の仕事そして国民福祉団会員の講習などだった。そのほか、国民福祉団の最重要援助事業「母と子」の指導権も手にした。援助事業「母と子」は乳児死亡率を下げ、遺伝病を持つ次世代を徹底的に回避することを目的としていた。

ショルツ＝クリンクはナチ国民福祉団に対してかなりの自立性を享受した。ヒルゲンフェルトとの合意で、ソーシャルワーカーを育成する福祉学校を開校し、校長の任命およびカリキュラムの決定については全国女性指導者の同意が必要であること、そして理事会には必ずナチ女性団から代表が一人加わることになった。

e. 全国生産団 (RNS)

1935年2月に農業大臣ヴァルター・ダレとの協定により、ショルツ＝クリンクはナチ女性団と全国生産団との協働を確実にした。これによって、生産団の専門家は農業関係についてのナチ女性団の専門家でもあった。生産団は、女性が参加する全ての催しあるいは告知について、事前にナチ女性団と協議し調整しなければならなくなった。農村女性の世界観教育はナチ女性団の特権であると明言することによって、全国女性指導者は農村女性への影響力も勝ち得た。生産団に残されたのは、農村女性に対する職業教育だけとなった。

(4) ナチ女性団、ドイツ女性事業団の主な活動

ショルツ＝クリンクは、彼女に任されたナチ女性団とドイツ女性事業団だけでなく、女性組織以外に組み込まれた女性たちとの連携を求めたことから、1939年時点で200万人以上のナチ女性団員、400万人のドイツ女性事業団員、それに500万人のドイツ労働戦線の女性、10万人以上の女性教師の合計約1,200万人の女性を掌握していた。⁽²⁶⁾ ナチ女性団員はドイツ女性事業団のさまざまな組織の指導者だったので、両者は一体で仕事をしていった。彼女たちの主たる仕事は社会福祉活動と、女性に対する啓蒙と教育だった。

ナチ女性団とドイツ女性事業団は、全国女性指導部組織図にあるように、さまざまな部門で活動した。ショルツ＝クリンク就任前からナチ女性団が積極的に活動したのは、冬期救援事業だった。貧困と窮乏の時期に、寄付金や物品を集めて苦しい生活を送る人々を支援した。この事業は「援助奉仕団」の部門に分類されるが、農村の収穫援助などもこの部門の重要な仕事だった。冬期救援事業は、戦争が長引くにつれ再び大きな活動意義を持つことになる。ここでは、最大部門である「全国母親奉仕団」、次に大きい部門の「国民経済／家庭経済」、そして「国境地方および外国」の部門について少し詳しく見てみたい。

1934年の党大会女性会議でショルツ＝クリンクは始動し始めた活動部門について概説し、教育を通して作られる理想の女性を次のように描写している。

「私たちが思い描くドイツ女性は、民族が置かれている状況が求めるのであれば、贅沢や享樂を放棄できなければならない。ドイツ女性は精神的にも肉体的にも健康でなければならず、精神労働も肉体労働もできなければならない。ドイツ女性は、私たちが今日強いられている厳しい生活を快適な生活に変えられなければならない。最後にドイツ女性は、私たち国民を脅かす困難と危機を心得ていなければならない。一ドイツ女性は求められていることすべてを進んでしなければならない。一言で言えば、政治的思考ができなければならないということです。他の国民と闘うという意味での政治性ではなく、ドイツ女性も自信と誇りを持って国民全体と共に感じ、考え、奉仕するという意味での政治性です。⁽²⁷⁾

女性の世界は夫、子ども、家庭であり、国民社会主義国家における女性の闘いは子どもを生むことであるというヒトラーの演説の直後にこの演説はなされている。ヒトラーとは対照的に、ここでは母性が強調されていないことに気づくだろう。筆者は『ナチ女性展望』における母親像の分析を行ったことがあるが、初期の母親像はマリア像を利用して理念的な説明がなされており、子だくさんを推奨する地母神のイメージが登場するのは、経済状況がようやく好転し始める1935年から36年にかけての頃だった。⁽²⁸⁾一年後の1935年9月の党大会ではそれゆえ、全国母親奉仕団の仕事は、若い母親やこれから母親になる人々に、リベラルな時代がしそこなったこと、すなわち結婚することで私たちが民族の母になるという意識を教えることだと明言している。しかし、1934年はインフレ、失業、食糧難、住宅難がドイツの国民生活を色濃く支配していただろう。贅沢を諦めることはもとより、絶望的にならず健康に生きていくよう、そして苦難の生活を少しでも快適にする知恵を身につける大切さを現実にもとらえて訴えている。乳児死亡率の高さ、家族内の病気の頻出は、育児、栄養の摂取、健康や住居の衛生状態に関する知識の欠如だと考えられていたので、ナチ女性団は全国母親奉仕団を通じて実践的女性教育の準備をしているところだった。興味深いのは、「政治的思考」の勧めである。女性は政治的思考とは無縁であるとの見解があつたにもかかわらず、ショルツ＝クリンクが繰り返し女性の政治教育の必要性を訴えることができたのは、その目的が、女性も女性の領域で国家建設にかかわる上で最低限必須の知識を持つことが不可欠であるとナチ指導部を納得させることができたからである。この点は、全国女性指導部の「国民経済／家庭経済」の部門で改めて見ることにする。1935年頃まで折りに触れてショルツ＝クリンクは女性教育について発言している。「女性は教育を通して自分と向かい合える」、「子どもの教育者として、母親が進歩もなく愚かであってはならない」、「教育を通して女性は自らの力と価値を意識すべきです」、「『女性

に対する尊敬』という考えを持たぬ男性もいる。そうであれば、私たち女性の義務は、教育や講習を通して将来の世代に影響を及ぼし、徹底的な考え方の変更をもたらすことです」等である。ここに徹底的な大衆教育・啓蒙を通じて女性の地位の底上げを計ろうとする全国女性指導者の姿勢を読み取ることができるだろう。

a. 全国母親奉仕団

1934年5月の母の日に設立された全国母親奉仕団は、ナチ国民福祉団と連携して救援事業「母と子」を推進した。貧しい子たくさん家庭に救援小包を送り、洗濯物や繕い物を回収し、仕上がりを戻す支援をした。疲れた母親を一時的に休養させるプログラムも実施された。

全国奉仕団の最も重要な活動は、母親学校の開校と運営、母親講習の開催だった。母親学校・母親講習の目的は、子どもの世話と教育の経験が豊かで、家政の仕事をこなし、身体的精神的に有能な母親の育成だった。母親学校は都市部で開校されたが、開校が難しい農村部では巡回母親講習会が開かれた。母親講習会のテーマは、①家政（料理、栄養、家計、家事、菜園など）、②裁縫、③健康管理、④体操、⑤子どもの教育と文化生活、⑥国民社会主義の思想、に大別され、各講習は1週間に実習2時間と理論1時間の6週間構成で、参加費は2マルクだった。（図6）講習は午前・午後・夕方のコースが設けられ、時間帯を選べた。子どもと一緒に参加して「保育」も利用できた。中核講習以外にも補助講座が色々あって、人気は両親そろって参加できるおもちゃの改良・製作を学ぶ工作講座だった。

母親講習会参加者のデータを見ると⁽²⁹⁾、1939年までに170万人が約10万の講習会のどれかに出席しており、1944年までにその数は500万人に達している。また、25,000か所の母親相談所も開所され、緊急の相談に助言や情報、援助を与えた。この相談所の利用者



図6 全国母親奉仕団の乳児講習
『ナチ女性展望』第6年度23号(1938年5月)

料理講習
第6年度6号(1937年9月)

は1千万人以上に及んだ。母親学校は1937年時点ですでに200校あり、数千人の女性教員の職を提供することになった。その後も800校が予定された。母親学校は大管区と管区にそれぞれ1校存在した。そのほか若い女性を対象とした花嫁学校も創設された。こうして母親・主婦の仕事は専門化され、その意義は社会的に高められた。

この他、女性指導者を専門的に養成する国立学校がベルリンとコーブルクに開校されたほか、指導部スタッフを人間的・専門的に管理職に適応できる力を伸ばすための大管区学校があった。またドイツ女子青年団員は母親講習の家政、健康管理、教育問題のコースを受け合格することが1938年に義務づけられた。

母親講習で特に人気があったのは衣料のリフォームや手入れ方法、自家製果実や野菜の保存方法、限られた食材でおいしく栄養のある料理の作り方などの実践コースだったが、人種学や遺伝病学のような国民社会主義の世界観に関する講義は人気がなかった。そうした授業を担当できる教師が不足していたこともある。そもそもショルツ＝クリンクも演説の中で、人種学や遺伝病の問題について語ったことはなかった。女性たちに国民社会主義的世界観を植え込むという彼女の課題は、女性たちがこうした母親講習や救援事業によって国家から利益を受けたり、逆に母親講習を支え、福祉活動で社会的に活躍する場を与えられることで国民社会主義国家を評価し、それゆえ公益を重んじて国家に奉仕する精神を持ってくれさえすれば十分だったのかもしれない。

b. 国民経済／家庭経済

家政は、民族共同体のための女性の戦略的動員領域だった。1934年にヒトラーが女性たちに向かって演説したように、国民社会主義において家族は社会の基礎として規定された。これに従えば、家族は外に向けては男性によって代表され、その内部においては女性による家政上の仕事によって動かされた。その際女性の役割は、理想化された政治的意味だけでなく、国民経済の視点において実践的価値をもった。1936年から四カ年計画を実行するにあたって家政は国民経済の中心的機能を担うことになった。

ドイツ国民の80%の財産は、女性の手を通っていく。ここから私たちにとって根本的な意味をもつ責任が発生する。なぜなら、あなた方の夫あるいはあなた方自身が稼いだお金はあなた方だけのものではなく、ドイツ国民のものなのです。今日1プフェニヒも無駄に使ってはなりません。ドイツのお金を1プフェニヒたりともドイツ女性によってドイツ国民の損害になるよう支出されてはなりません。⁽³⁰⁾

この全国女性指導者の言葉は、ドイツがまだ窮乏の時代に語られた。それが、第三帝国

の戦時経済準備段階になると、工業生産は専ら武器やそれに必要な原料生産に集中し、その分、消費財の生産は制限され、個人消費は制限された。主婦は、たとえば栄養があり、しかも安く料理できること、残り物をうまく利用できること、質素で安価な洋服を着ること、玩具や家事道具は自分で作ること、リサイクルをマスターすることが求められたが、こうしたことは根本において軍事的意味合いを持った。戦時には実際「バターの代わりに大砲を」のスローガンの下で、女性たちはわずかな食料配給でもうまくやりくりしなければならなかった。

全国女性指導部の部門「国民経済／家庭経済」は国民経済についての啓蒙、消費者問題、国民経済の視点に立った栄養・被服・住居の実践、家政教育の講習を開催するほか、家政に関する助言、入植女性に対する助言を行った。すなわち、ナチ女性団とドイツ女性事業団による家政の安定化と専門化は、女性たちの間に経済的専門知識とその実践のための技術的知識を広めていったのである。

ショルツ＝クリンクが初期に繰り返し主張した女性の「政治的思考」には、男性と共に国家を構成する性として、女性も国家の現在と行く末を理解すべきという勧めが含まれていたが、軍拡路線へ舵を切った「四カ年計画」以後は、家政は国民経済に特化された形で、公式にその政治的意味を認められ、女性の自立した領域となった。女性たちが国民経済に組み入れられるこの時期は、工場での女性労働力が求められる時期でもあった。

c. 国境地方および外国

ショルツ＝クリンクはさまざまな仕事を併行して行ったが、主たる仕事は政治的演説だった。1937年4月から1942年9月までに約230の行事に参加し、そこで演説するか公式の仕事をこなした。落成式や展覧会に引っ張りだこの特別招待客でもあった。戦前、全国女性指導者は定期的に政府の全てのプレス会議に出席した。ベルリンの大管区指導者会議に招待されたし、1942年には全国航空省会議にも出席している。

外国旅行もプロパガンダ活動として重要だった。1937年にはコペンハーゲン、ストックホルム、⁽³¹⁾ チューリヒ、1939年にはローマとロンドン、1940年にはフランス、



図7 「スペイン女性指導者ピラル・プリモ・デ・リヴェーラを迎えて」『ナチ女性展望』第6年度24号(1938年5月)

終戦までにオランダ、ノルウェー、ルクセンブルクへ出かけている。外国での演説では、国民社会主義の優秀さ、それが女性に与えた長所が並べられ、ドイツ女性の地位が低く搾取されていると書き立てる外国の新聞には反証した。⁽³¹⁾ 全国女性指導者が登場する時は、女性ジャーナリスト、知識人、大学講師や芸術家が出席することが多かった。彼女たちは、ドイツ女性の活動について説明を聞いたがった。そこで、「国境地方および外国」部門では、毎月外国からの客を全国女性指導部に迎える企画を立てた。ショルツ＝クリンクが常に交流を持った外国の女性運動の指導者たち、たとえばスペインの女性指導者ピラル・プリモ・デ・リヴェーラ(図7)やイタリアの女性ファシスト指導者マルケーザ・オルガ・デル・ヴァジエロ、フィンランドの女性組織「ロツダス」代表のフェニ・ルーコネンらが全国女性指導部を表敬訪問したし⁽³²⁾、アメリカやイギリスの女性ジャーナリスト、ヨーロッパの知識人や大学講師の女性たちも全国女性指導部を訪れた。外国の世論は、ナチス・ドイツの女性の状況に大きな関心をもち、その女性政策を憂慮し批判した。しかしその一方で、外国の多くの女性たちが、女性大衆を動員するショルツ＝クリンク的能力と、反フェミニズム的選択肢を通して社会における女性の新しい立場をつくり出していくアイデアに関心を示した。

3. 第二次世界大戦期

戦時条件下において、いかにして女性の職業労働と母親としての女性生活を調和させら



全国女性指導者 ゲルトルート・ショルツ＝クリンク(1940年)。ヒトラーの専属カメラマン、ハインリヒ・ホフマン撮影。『ナチ女性展望』の折り込み写真として使われた。

れるのか、あるいは民族共同体に対する高まる責任を通していかにして女性の影響力を拡大するのかという問題に、ショルツ＝クリンクは説得力のある答えを提供できないでいる。1940年から終戦までの彼女の演説や記事には、労働する母親たちの負担援助の訴え、女性の動員準備への要請、ついには前線への女性動員についての立場が交錯している。実際問題として、彼女は党に対しても女性たちに対しても困難な状況に対して十分説得力ある回答を出せる立場にはなかった。

四カ年計画の告知によってイデオロギーと女性労働動員との指導部の矛盾をうまく仲介しつつ、労働力の提供によって共同体に対する女性の貢献を印象づけ、それによってショルツ＝クリンクは自分の役割と影響力を拡大することができた。

しかし戦争勃発後は、自分の計画から逸れることを余儀なくされてゆく。なぜなら、戦争の遂行に伴って女性に対する党指導部の要求が過大となり、戦時労働動員の搾取的現実から女性を守ることによって精一杯になったからである。結果的にみれば、その努力は戦争という破壊的なエネルギーの前でコントロール不能になっていった。

すでに戦前に軍需産業での女性の搾取は明らかであって、ショルツ＝クリンクは女性労働者に対する保護をさらに拡大し、ドイツ労働戦線女性局や工場内のソーシャルワーカーの包括的役割を要求した。この方針は、1938年6月末にローマで開催された第三回世界会議「労働と喜び」において女性局の代表団から説明された。ドイツ女性たちは、民族維持のために就労女性に特別な保護を与える必要があると提案し、その提案は「新国民社会主義母性保護法」に取り入れられた。

1942年5月17日の「就労する母親保護法」(母性保護法)⁽³³⁾はヴァイマル時代の1927年7月16日の「出産前後の女性就労に関する法」に代わるものだった。この新しい法律はとりわけ、母と子の生命と健康が脅かされると医師が証明した場合、妊婦を労働させてはならないと謳っている。その上、残業、夜間勤務や休日勤務は禁止され、労働時間も日に8時間を超えてはならなかった。立ち仕事、重労働は条件が付けられた。産前の6週間と産後の6週間は、最後の13週間分の手取りの給料の平均額の出産手当を受給できた。日割り計算で最低でも2マルクでなければならなかった。新法では授乳時間も日に30分2回から、45分2回に拡大され、企業は(ベッドのある)授乳部屋を設置する義務が課された。解雇告知禁止期間もこれまで妊娠後から出産後6週間から4か月に拡大された。

この法律は、健康保険に入っていない就労女性も適用対象とした。したがって、初めて農業、林業、家事手伝い等に従事する女性全員が対象として含まれるようになった。健康保健に加入していない場合は、保護期間、労働対価を引き続き受け取ることができた。また、この法律は妊娠・出産後の期間だけでなく、14歳以下の子どもを育てる母親にも適用され、残業、夜間勤務、祝日勤務の禁止のほか、週に1日、午前か午後に休みを取ることができた。企業には託児所を設置する義務があった。

この法律の前文には、出産前後のあらゆる損失と不利益から守られて初めて、健康な子どもの誕生という民族共同体にとって最大の仕事をドイツ女性は果たすことができると明記された。この法律は、当時世界で最も進歩的な母性保護法であると賞賛された。実際、ヴァイマル共和国時代に社会民主党や労働組合から要求されていた改善案がいくつか含まれていたからである。

ショルツ＝クリンクは1942年に「占領地域に動員されたドイツ女性と女子青年担当全権代理」に指名された。形式的なポストではあったが、この役職は戦時女性動員について公式の場で自分の意見を表明する機会を彼女に与えた。1943年10月のバート・シャッヘ

ンでの司令官会議で、国防軍指揮官たちに対して、国防軍の女性補助員を女性兵士として尊重すべきであると要求している。国防軍に志願ないし動員された女性たちは、東部戦線に送られる男性兵士の仕事を引き継いだにもかかわらず、「女性補助員」と呼ばれていた。この呼び方の中にはナチ・イデオロギーが反映していた。つまり、女性は男性の補助者であること、女性の働きの過小評価、さらに携わる任務が危険のない仕事であるという印象を与えようとしたのだった。

司令官会議でただ一人の女性として苦情を訴え、要求を表明したが、それは軍事的領域における女性に関する時代錯誤的立場を強く問題視することになった。それまでは全く考えられなかったこうした場でのショルツ＝クリンクの立場表明は、戦争というカタストロフな状況によって可能になったことだった。しかし、ショルツ＝クリンクが女性の軍隊内動員を歓迎したとは到底考えられない。ナチ政権のイデオロギーから見ても、全く不本意なことだった。⁽³⁴⁾

戦争は、女性にとって以前には想像もできなかった多様な職業の可能性をつくり出した。このこと自体はショルツ＝クリンクのナチ指導部に対する立場を強化し、社会的影響力を増大させることにつながったが、その一方で、社会における女性の役割と女性性のバランスという彼女の理想から言えば、ショルツ＝クリンクの敗北を意味することになった。

おわりに

ナチ指導部は、ヴァイマル時代の女性解放運動を仇敵とし、国民社会主義の人種と人口政策を推し進めるために「生物学的母性」を女性性とし、家庭で子どもを産み育て、夫に従うという極めて保守的な女性像を打ち出した。ショルツ＝クリンクは、同レベルでの男女の平等化は社会的混乱と指導部との対立を招くと考え、それに代わる女性の自由を獲得しようとした。

国家のために、民族共同体建設のために男性の領域の仕事を補完する形で女性も自分の領域で貢献すれば、それぞれの仕事は同価値であるとヒトラーは語った。彼は、あくまで家父長的男女性別役割分担について語っただけだが、ショルツ＝クリンクはその中に男女の分離した活動領域の自立性、そして女性領域内での女性活動拡大のチャンスを見つけ、実行に移して行った。彼女の行動の正当性は、男女の役割分担の根拠となる自然法を表向き信じるとの表明に立脚していた。「賢母」であるために、国民経済をも理解した「良妻」であるためを理由に、大々的な女性の大衆教育・啓蒙活動や福祉活動が展開され、「母」は就労女性の保護のための福祉活動にもつながった。こうして、生物学的女性性を切り札に、家政、保健、福祉、青少年教育といった女性の活動領域を確立し、1,200万人の女性に影響力を及ぼす組織を作り上げていった。

1936年の年頭に全国女性指導者は、家庭において自らの子どもを育てることだけでなく、女性が活躍できる領域において「民族の母」という意識をもって公益につくすよう『ナチ女性展望』の中で語っている。⁽³⁵⁾これをうけて、全国女性指導部も『ナチ女性展望』の中で、良妻賢母だけでは不十分であり、「民族の母」としての意識をもってドイツ女性事業団は社会活動を展開すべしと鼓舞している。⁽³⁶⁾ここには、子どもを産み、国民社会主義思想に基づいて育て、家庭を守るという公的女性イデオロギーから、家庭という「小さな世界」に限定されず、社会そのものを「家庭」とみなして、その母たる行動を取るべきであるという拡大解釈が生じている。この「民族の母」というスローガンは女性たちが家から社会に出て行く口実となった。

この「精神的母性」という考え方は、ブルジョワ女性運動を想起させる。第一次世界大戦中、女性たちは「女性祖国奉仕団」を結成して精神的母親であることという原則によって国家に対する自らの義務に従い奉仕した。戦後も共同体における女性の社会参加はこの母親精神に特徴付けられていた。「国家」への奉仕と義務の達成を原則に国民的社会参加を勧めようとしたヴァイマル時代の女性たちは、男性とのいかなる摩擦も避けるために、精神的母性に基づいた女性の「特別な役割」として家族と家を取り上げた。家族、家政、教育、慈善、福祉は女性たち自身によって女性の領域と言われるようになり、女性の政治の「非政治的」形が作り出された。社会の性別領域分離はすでにヴィルヘルム時代から市民的国民国家にとって体質的なものと見なされていたので、特に問題もなく女性の自立した活動領域は了解された。

ショルツ＝クリンクは、この伝統を利用したと言えよう。「国家」が「民族共同体」に、「特別な役割」が「分離された領域」に取って代わった。母親であることが、ナチ時代において人口と人種政策上、ヴァイマル時代よりずっと大きな政治的意味を持った分、母性はさらに強力な切り札となり得た。その意味で、中央官庁の一部として機能した全国女性指導部とその活動は、ブルジョワ女性運動のヴィジョンが実現した姿と言っているかもしれない。もちろん、ショルツ＝クリンクに率いられた女性活動の成果あるいは失敗は、女性活動の側面からだけ考えられるのではなく、失業、再軍備そして戦争という国家が置かれた一般的社会的経済的条件の転換によっても影響されたことも忘れてはならない。

拙論はショルツ＝クリンクを賞賛するためにまとめられたものではない。少しでも当時の現実に則して、ナチ女性の活動を再構成してみたいと考えたからであった。ショルツ＝クリンクの政治的行動についてはようやく光が当てられるようになってきたものの、なぜこれほど長期間にわたって忘れられ、あるいは不当な評価を下されたのか。それを考えるのが出発点であった。

ショルツ＝クリンクは戦後逮捕され、連合軍による非ナチ化審査機関の裁判を受けた。

全国女性指導者としてナチ政権を徹底的に支え、戦後もナチ・イデオロギーを信奉しているとして彼女は「主犯」のカテゴリーに入れられていた。しかし、判決内容は3年間の禁固刑と罰金刑、市民権の一定期間の剥奪だった。禁固刑は恩赦申請が受理された。結果としてはショルツ＝クリンクに幸いしたが、法廷は、ナチ体制における全国女性指導者が握っていた権力と女性活動の意味を理解していなかったか、理解するつもりがなかったのかもしれない。彼女が非の打ち所のない私生活を送り、政治的工作といっても専ら家政や社会的慈善行為というポジティブな活動をしたのであって、ほかの女性たち同様に「大きな政治」、すなわち戦争にも関与しなかったとして、罪は和らげられた。その一方で、女性とは全く関わりのない「大きな政治」に入り込もうとし、女性性をゆがめたと咎められた。⁽³⁷⁾ 家父長的思考は、国民社会主義国家の外でも支配的だったのである。

国民社会主義体制の女性たちは根本的に無実であるということに見られるアンビバレンスは、戦後ドイツ社会においても普通に見られ、その後数十年にわたって歴史記述にも影響を及ぼした。その急先鋒はフェミニズム運動であったかもしれない。フェミニズム運動は、国民社会主義国家を男性国家として、そして女性を抑圧する極端な家父長制国家と規定した。この規定は、ナチス・ドイツを貶めるために、ナチ政権時代にすでに敵国から言われていたことであり、ショルツ＝クリンクはしばしば演説の中でこうした攻撃に反駁していた。このフェミニズムの考え方からすると、女性とは生物学的集合体であり、家父長制の集団的犠牲者であり、平和をもたらす役目を担った。ナチ体制の共犯者となった何人かの女性たちは女性運動の側からも女性性をゆがめたというレッテルを貼られ、無実の女性集団から排除されたのである。

ナチ党指導部は非常に保守的なジェンダー秩序を打ち出した。そして、このイデオロギーはたしかに最後まで撤回されることはなかった。しかし、このイデオロギー的教条主義に呪縛されている限り、実際には複雑に変化したジェンダーを巡る女性と男性の駆け引きは見てこないだろう。

(本論は、平成21年度～22年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究課題番号21652019「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」(研究代表者 加納実紀代)の研究の一部である。)

註

- (1) *NS Frauen Warte*. 2.Septemberheft 1934 (3.Jg. H.7), 'Die Rede des Führers auf dem Frauenkongreß in Nürnberg am 8. September 1934'.
- (2) *NS Frauen Warte*. 1.Oktoberheft 1935 (4.Jg. H.8), 'Ein Führer spricht zu den deutschen Frauen'.
- (3) *NS Frauen Warte*. 1.Maiheft 1936 (4.Jg. H.23), "Zwei Jahre Hilfswerk 'Mutter und Kind'" 参照。

- (4) Stephenson, Jill: *The Nazi Organization of Women*, London 1981; クローディア・クーンズ『父の国の母たち』(上・下) 時事通信社、1990 年。
- (5) Livi, Massimiliano: *Gertrud Scholtz-Klink Die Reichsfrauenführerin*. Münster, 2005; Berger, Christiane: “Reichsfrauenführerin” Gertrud Scholtz-Klink. *Eine nationalsozialistische Frauenkarriere in Verlauf, Retrospektive und Gegenwart*. Saarbrücken 2007.
- (6) 『ナチ女性展望』の解題および全号目次については、上野千鶴子・加納実紀代・神田より子・桑原ヒサ子・松崎洋子『軍事主義とジェンダー』インパクト出版会、2008 年、i-xlv 頁参照。
- (7) ‘Die 25 Punkte des Programms der NSDAP’ (<http://www.dhm.de/lemo/html/dokumente/nsdap25>), 2011 年1月31日取得。
- (8) クーンズ、(上) 235-236 頁参照。
- (9) 同上、227 頁。
- (10) アルフレート・ローゼンベルク (吹田順助・上村清延共訳)『二十世紀の神話—現代の心霊的・精神的な価値 争闘に対する一つの評価』中央公論社、昭和16年(9版)、393-408 頁参照。
- (11) マッシュー・セリグマン、ジョン・ダヴィソン、ジョン・マクドナルド (松尾恭子訳)『写真で見るヒトラー政権下の人びとと日常』原書房、2010 年、109-111 頁。
- (12) ローゼンベルク、407 頁。
- (13) Livi, S.189-190 参照。
- (14) 同上、S.113-114 参照。
- (15) 同上、S.116-117 参照。
- (16) *NS Frauen Warte*. 1.Januarheft 1934 (2.Jg. H.13), ‘Das deutsche Frauenwerk’; *NS Frauen Warte*. 2.Juliheft 1934 (3.Jg. H.2), ‘Durch Kampf zum Sieg!’ 参照。
- (17) Livi, S.111 頁参照。
- (18) *NS Frauen Warte*. 2.Augustheft 1934 (3.Jg. H.5), ‘Die Stellung der Frau im neuen Deutschland’
- (19) 註(2)参照。
- (20) *NS Frauen Warte*. 2.Septemberheft 1934 (3.Jg. H.7), ‘Die Rede der Führerin der deutschen Frauen. Pgn. Frau Gertrud Scholtz-Klink auf dem Frauenkongreß in Nürnberg am 8. 9. 1934’
- (21) 「四カ年計画」の推進によって、失業者数は1937 年1月に180 万人、1938 年100 万人、1939 年には30 万2,000 人にまで減少した。M. セリグマン他、202-205 頁参照。
- (22) *NS Frauen Warte*. 2.Septemberheft 1937 (6.Jg. H.6), ‘Einsatz der Frau in der Nation. Ausstellung der Reichsfrauenführung während des Parteitages in Nürnberg im Landgewerbemuseum’
- (23) a.a.O., ‘Die Ausstellung des Frauenamtes der Deutschen Arbeitsfront auf dem Reichsparteitag 1937’
- (24) *NS Frauen Warte*. 1.Februarheft 1938 (6.Jg. H.16).
- (25) 註(20)参照。
- (26) クーンズ、(上) 286 頁参照。
- (27) 註(17)参照。
- (28) 桑原ヒサ子「女性雑誌『ナチ女性展望』NS Frauen Warte がつくり出す母親像」敬和学園大学人文社会科学研究所年報 No.6、2008 年、33-48 頁。
- (29) *NS Frauen Warte*. 2.Maiheft 1934 (2.Jg. H.23), ‘Reichseinheitliche Richtlinien des Mütterdienstes im Deutschen Frauenwerk zur Durchführung der Mütterschulung’; 2.Juliheft 1934 (3.Jg. H.2), ‘Mütterschule der NS-Frauenschaft Breslau=Stadt’; 2.Novemberheft 1934 (3.Jg. H.11) ‘Ein Werk von Frauen für Frauen. Organisation und Arbeitsweise einer großstädtischen Mütterschule’; Februarheft 1937 (5.Jg. H.18), ‘Das Werk der Frau’ 参照。

- (30) Livi, S.159.
- (31) *NS Frauen Warte*. 1.Märzheft 1937 (5.Jg. H.19), 'Die Reichsfrauenführerin in Stockholm' 参照。
- (32) *NS Frauen Warte*. 2.Maiheft 1938 (6.Jg. H.24), 'Pilar Primo de Riveros Besuch in Deutschland'; 1.Juliheft 1941 (10.Jg. H.1), 'Die faschistische Frau im Dienste der Nation'; 1. Maiheft 1942 (10.Jg. H.18), 'Fanni Luukkönen, die feldherrliche Mutter' 参照。
- (33) *NS Frauen Warte*. Juli 1942 (11.Jg. H.1), 'Das neue Mutterschutzgesetz' 参照。
- (34) 桑原ヒサ子「ドイツ人女性兵士は存在しなかったのか—国防軍における女性補助員の実態」敬和学園大学人文社会科学研究所年報 No.8、2010 年、29-56 頁参照。
- (35) *NS Frauen Warte*. 2.Januarheft 1936 (4.Jg. H.16), 'Detusch sein—heißt stark sein'. 参照。
- (36) *NS Frauen Warte*. 3.Juliheft 1936 (5.Jg. H.3), 'Wehrhaftes Frauentum' 参照。
- (37) Livi, S.205-231 参照。